

戦後強制抑留の追憶

——寒さと飢えのソ連行——

和歌山県 林 三子雄

昭和二十年八月十七日、琿春背後の陣地を捨て、武装解除を受け、琿春飛行場集結。戦車、探照燈に囲まれ、騎馬や徒歩の自動小銃を抱えたソ連兵が巡回する中で仮眠中、暴走馬の駆け抜けがあり、驚いた者が立ち騒いだ。慌てたソ連兵の一斉発砲となり、頭上二面に銃弾の光線が縦横に飛び、硝煙に包まれ、たちまち修羅地獄と変わる。「伏せろ、伏せろ」と互いに制止して二十分くらいで鎮まったが、流れ弾で負傷した者が五百人以上あり、病院に運ばれ死んだ者もいると伝わる。

滞在八日目、移動開始し、自動小銃で威嚇されながら、昼も夜も歩く。とまればすぐ「坐れ」で、道路へ尻をおろす。大休止で炊飯時以外は、列を崩すとたちまち発砲、制止された。

三日目に金蒼の収容所に入る。本部建物一軒だけで部隊は山腹で野宿だが、夜は寒いので数人組み、横穴を掘る。隣の穴を潰さぬ様気遣いながら深く掘ってしのいだ。が、急速に寒くなり、毛布二枚と夏服ではつらい。

九月一日「第十二期の見習士官集合」があり、本部前で「八月十五日付少尉任官」を口達されたが、特別うれしいとも感じない。氷雨が降る日はやり切れなかったが、晴れると大霜柱が立ち、解けてぬかるむのもつらい。給食も量不足だ。寒くひもじいのが情けない。「何とかしてくれ」とかけ合うと『仕事をしていない人は食事も少ないのです。もうすぐ仕事があると食事も多くなる』との説明だと返って来た。ご馳走の夢のような話ばかりが話題になる。

十月中旬の寒風の強い夜、点呼の後で作業大隊編成発表があり、直ちに集合、出発式を行い、拍手で見送る先発千五百人、元気に発つ。数日間隔で第二次、第三次作業大隊を送り出し、残された病人と将校は、列車輸送で延吉へ送られ兵舎跡に収容された。破壊され荒れ果てた姿に驚いたが、屋内はうれしかった。営内で拾った天幕

布でリュックを縫い、乾パン、空缶で食器をつくる余裕ができたし、給食も安定し、落ち着く。

十一月三十日、重症者を入院させて、全員列車で琿春へ。前日支給された防寒具で固め、夜行軍が始まる。国境の山は上りがけわしいので、雪ですべる。押したり引いたり苦勞して越え、くだった次の丘へたどり着いたら、林の中に鉄道線路があつて貨物列車がとまつていた。線路沿いに貨車のわきを進むうち、一両四十人ずつ押し込まれた。

貨車は有蓋車で、家畜輸送車。前後部へ高さ百二十センチくらいに松厚板で棚、床は厚さ五センチほど、栗桿が敷かれている。中央入り口の真ん中にダルマストープ一基据えつけ、バケツ、ヤカン、十能、火掻きが各一個ずつ置かれているだけ、押されるままに一ます十人ずつに別れて、毛布等荷物をおろす。狭いので交互に頭を壁に、隣人の足を抱くように割り振る。

「薪採り作業、各車十人」呼集で若者参加し、指定された雑木林の生木を倒す。鋸が一挺だけなので、軍刀の試し斬りをし、薪を炊事車両へ運ぶ。一部を各貨車へ持

ち込み、ストーブ点火。ろうそくが配られ点灯。乗車人数点検し、外から掛け金をかけられた。わずかに小便流しの隙き間だけだ。携行の乾パンで夕食。早速横になり、行軍疲れでよく眠った。

いつの間にか列車は動いている。ふと目覚め、少時周辺を見回し、隣人に「お早うございます」と初対面の自己紹介を交わした。停車して「飯上げ」の呼び声とともに掛け金が外される。早速当番回りを決め、二人が受領に走る。持ち帰った桶の「油入り塩がゆ」を分配したら、飯盒の掛け盒に一杯ずつあったが「食った気がせん」とみな不服顔で、また横に臥す。

ストーブの火が消えて寒い、燃料がない。隣列車に石炭貨車を見つけて無断で失敬して運び込む。「若い衆に火の番頼む」と言われ、三人で当番をしたが、運搬具に困った。停車時間と石炭車との距離関係で、量の確保に心を砕いた。排便は列車入り口の裏側へ並んで落としたが、地吹雪とともに先行車の落とし紙が駅構内を狂い舞う様は凄いと感じた。

二週間目にバイカル湖畔通過する。素晴らしい冬景色

だ。真っ白い山々、結氷の向こうに水が波立つ湖面と、澄んだ空気、「この景色」二度と見れまい、見おさめておこう。これからがシベリア、何が待つ。凍死か、餓死か、帰れる望みは薄い。この分では陣地で自決した司令部の連中に負けだ。彼らの方が先を見取ったぞ」と。陣地を出る朝、別れの酒宴を張り、車坐で童謡を合唱し続けていた青年将校連中が、コップ片手に手招きをして「来いよ、一緒に死のう。敗けて何の望みがあるもんか」と誘われたときの状況が頭に浮かぶ。あのときは「部下を無事に国へ連れて帰るのが責任」と感じて別れたのに、今は部下がどこに行ったかも知らず、空虚にほうけて坐り、ストーブの火を見ているが、足が冷たい、空腹がこたえる。

誰かが「こりゃ殺されるぞ」と言う。昼間が短い、夜ばかりの毎日だ。防寒帽をかむって寝転んでも、壁や天井へ氷が厚く付いていて、冷たいのでつらい。毛布も壁の水とつながり、凍りついている。ストーブが真っ赤に焼けても暖かくなならない。寒いから小便ばかり出て、隙き間風がやけに痛い。

冬至の日に、日の出十一時四十分、薄日のまま二時、日没午後三時からイルクルーツクで入浴サービスあり。一組百五十人くらいずつ下車して浴場へ歩く。「毛布も持て」とみな毛布をかぶって、浴場で衣類をつり紐につるして熱気乾燥室へ入れる。一時間の間、シャワーで半年份の垢を洗ってサッパリしたが、出口で脇毛と陰毛を剃られ赤チンを塗られたので、嫌な気分なり。

翌日から列車は狂ったように疾走し続けた。十時間もとまらないので石炭不足で困る。さらに給食が二回分上がったり、欠食したりするのに参った。穀物支給も、米が二週間、コーリャン七日、大豆四日、小豆、蕎麦、豌豆、粟、トウモロコシ粉と、だんだんと低質と思われる食事になり、閉口した。

「正月や地獄の旅の一里塚」と元旦の風景を望めば、列車は山脈横断をしている。もうウラル山脈だと推量す。沿線に樅の木や樅の槍が見える。「もう帰れないぞ！一蓮托生、なるようになる、みな我慢しているのだ、男なら辛棒」と励まし合ったが、余り元氣は出ない。

一月四日十時半ごろ「下車」と叫んでくるのが聞こえ

る。雪原に朝日が輝き出す。荷物を背負って並び、三十五日間暮らした貨車に別れて雑木林に入り、ラーダ収容所に着く。警備門を入るとき「帯刀を預けろ」と軍刀に氏名札をつけて渡した。

収容所の建物は、入り口へ立つまで気づかない低い雪山だ。換気櫓だけ黒く見える、半地下式丸太小屋で、中央にペーチカ一基、周辺二メートルぐらいの広場で、広場から通路が十文字と分かれ、その幅一メートルぐらいあり、通路両側に二段棚、周囲壁際も通路で、大部屋だ。薄暗い裸電球が天井に数個灯っていて、使い古した小屋だ。中は異臭を感じたが、次第になれた。年輩組を中央近く、若者は周辺へと割り振られて、入り口に一番近い二階と決まった。

一棟に四百人ぐらい詰まり、部屋の温度も昇ったように思えたが、夜が更けるに従い小便に通うため、出入り多くなり、朝まで戸の開閉が忙しく、いつも冷たい風が突き刺すように襲うので閉口した。ここでの生活が思いやられる。いつまで頑張れることやら。

ウズベクにて

和歌山県 浜 寿 一

戦争と言うものは、勝ったものも負けたものも、ただ惨めさをなめるだけである。ソ連に抑留された二年間、ウズベク共和国という中央アジアの辺境の地ではあったが、そこに暮らすウズベク人たちの生活は、私たち、とらわれの身の日本人とさして変わるところのない貧しいものであった。

今にして考えると、戦争に敗れた日本の方が、勝ったソ連より当時としては物資がまだまだあった方ではなかったろうか。

こんなことがあった。二階建ての貨物列車にぎっしりと詰め込まれ、シベリアの平原を西へ西へと運ばれていったとき、バイカル湖の近くの駅で、全員防寒服を取り上げられてしまった。

シベリア鉄道のノボシビルスクから私たちは別の鉄道